

## ミクロネシア=サテワヌ島民族誌 : 解説

著者	須藤 健一
ページ	391-403
発行年	1984-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5174">http://hdl.handle.net/10502/5174</a>

## 調査地サタウル島

太平洋には一万におよぶ島々が点在している。それらの島々は、語尾に「ネシア」をつけてよばれる三つの島嶼部に線引きされる。メラネシア、ポリネシアおよびミクロネシアがそれである。「ネシア」とは、ギリシア語で「島々」をさし、右の三つの地域の名称は、それぞれ、「黒い島々」、「多くの島々」、「小さな島々」を意味している。

本書でとりあげられるミクロネシアは、赤道をはさんでメラネシアの北側にあたり、東西をポリネシアとフィリピン、インドネシアとに画された地域である。ここには、約二、〇〇〇の島々が存在するが、人が居住する島は、一割にもみたない。東から、ナウル島、ギルバート、マーシャル、カロリン、マリアナの四群島より構成される。最大の島でも、淡路島とほぼ同じグラム島であり、文字どおり「小さな島々」の世界である。

ミクロネシアは、一五二一年にマゼランによるグラム島の発見以来、世界史に登場する。それ以降、グラム島を除くマリアナ、カロリン、マーシャルの各群島は、スペイン、ドイツ、日本、アメリカの支配下におかれてきた。第一次世界大戦の勃発（一九一四年）とともに、ドイツ領であったそれら三群島は、日本海軍に占領された。そして、一九二〇年から二五年間は、日本が国際連盟の委任統治領として、「南洋群島」の名のもとにおさめてきた。

その間、この地域には、日本からの農業移民、商人、軍属などが住み、一九四〇年ころの在留邦人の人口は、八万を数え、現住民人口の二倍にも達した。第二次世界大戦後の一九四七年から、この南洋群島は、アメリカの国連信託統治領となった。そして、一九八五年に予定されている統治期限の終了後、それらの島々は、「民族自立」への道を歩むことになっている。

サイパンを中心とする「北マリアナ連邦」は、アメリカの自治領としての政治的地位が約束されている。そして、憲法に核廃絶をうたった「ペラウ（パラオ）共和国」、ヤップ、トラック、ポナペ、クサイエ（コシヤエ）の四諸島からなる「ミクロネシア連邦」とビキニ被爆で知られる「マーシャル共和国」は、それぞれアメリカと「自由連合」の関係を保持する三つの自

治政府を樹立する準備にはいっている。つまり、現在一四万人の人びとの住む旧南洋群島は、四つの「ミニ国家」に分裂するのである。

さて、本書の舞台となるサテワル（サタワル）島は、ミクロネシアのなかでもとりわけ「ミクロ」な島である。それは、行政的には、ミクロネシア連邦のヤップ州に帰属する人口五〇〇〇人の島である。この島は、行政の中心地ヤップ島から、一、〇〇〇キロメートルも離れた「絶海の孤島」で、近代化・文明化の波から比較的とり残されたところである。現在でも、二、三か月に一度、コブラの買い付けや生活物資の輸送を目的とする不定期船が島を訪れるだけである。著者の土方さんが、五〇年前にサタワル島へ赴いたときとくらべても、さほど交通の便が良くなっているとはいえない。そのこともあってサタワル島は、伝統的な生活様式を現在に伝えている太平洋でも数少ない島の一つである。

サタワル文化の伝統性は、航海術に象徴される。サタワル島は、裾礁が発達しない隆起珊瑚礁島で、火山島や環礁島にくらべ、劣悪な環境のもとにおかれている。海のだだ中の島とはいえ、漁業資源の面においてさえ、島の周辺では十分な漁獲をまかなうことができない。それで、島の男たちは、さかんに、遠くの珊瑚礁や無人島へ魚介類を求めてのりだす。また、地味に乏しい島のもとでは、食料資源や生活必需品の自給が不可能である。彼らは、数百キロメートル離れた他島へ交易の航海にもでかけなければならない。

動力船をあてにできないサタワルの人びとは、それらの活動を昔ながらのカヌーにたよっている。彼らは、海図や磁気コンパスの六分儀などの文明の利器を用いなくても、潮流、波、風、星、太陽などの自然現象をたくみに応用した独自の航海術で大洋をのりきっている。そのようなサタワルの人びとのことが、数年前に日本やアメリカで話題にのぼったことがある。一九七五年、沖縄で開催された国際海洋博覧会には、サタワルの男六人が一そうのカヌーを操って参加した。サタワルから沖縄まで三、〇〇〇キロメートルの海を制覇した彼らの航海術の優秀さが遺憾なく証明されたのである。

また、翌一九七六年には、アメリカの独立二百年祭を記念して企画されたハワイ・タヒチ島間、四、五〇〇キロメートルの航海を指揮したのも、サタワルの航海者であった。これは、古代ハワイのダブル・カヌーを復元し、伝統的航海術に基づいてハワイ人の故地、タヒチ島へたどりつこうという実験航海であった。この航海の成功によってサタワルの航海術が、「ポリネシアの海を征服した」と、大きな反響をよんだものである。彼らは、現代の機械文明の恩恵に浴さなくても、太平洋の大海原を奔放に往来できる独自の航海術をのみだした偉大な海洋民の末裔なのである。著者が五〇年前に、このサタワルの文化に注目して、調査の対象地としたことは、氏の卓見といえよう。

## 著者の経歴と著作

本書の内容の解説にはいるまえに、著者の経歴と著作を紹介しておこう。

### 経歴

- 一九〇〇（明治三三）年、東京小石川で生まれる。父は陸軍大佐、土方久路。
- 一九一九（大正八）年、東京美術学校（現東京芸術大学）彫塑科に入学。在学中から二科展に石膏彫刻を出品。
- 一九二四（大正一三）年、東京美術学校彫塑科卒業。以後、バラオに赴くまで石膏彫刻および木彫の作品を二科展、院展に出品し、また個展もひらく。
- 一九二九（昭和四）年、二九歳の春にバラオへ渡る。以後、二年半バラオに住み、絵画、木彫などの創作活動にはげむかわら、バラオの民族芸術の調査や民族的調査をおこなう。また、バラオ南西離島へも足をのぼし、調査を実施する。
- 一九三一（昭和六）年一〇月、三一歳のときに、ヤップ離島を一巡してサタワル島にはいる。以後七年間、この島で精力的に油絵、木彫の製作にはげむ。同時にサタワル社会の文化全般についての参与観察をつづける。
- 一九三九（昭和一四）年一月、サタワルからバラオへ戻る。南洋庁物産陳列所の嘱託となって、バラオ住民の生活慣行、遺跡・遺物の調査研究と民具の収集に従事する。
- 一九四一（昭和一六）年、カロリン、マーシャルの島々を一〇〇日間にわたって巡航し、各島の社会組織とくに土地制度などの調査にあたる。
- 一九四二（昭和一七）年三月、帰国。一二月には、陸軍嘱託の「ボルネオ調査団」の民族班長として北ボルネオにわたる。この年に、『バラオの神話伝説』翌年に『流木』を出版。
- 一九四四（昭和一九）年、ボルネオより香港経由で帰国。
- 一九四五（昭和二〇）年、『サテワヌ島民話』、『文化の果にて』およびサタワル、バラオ関係の論文をあいついで発表する。同時期に、石膏、ブロンズ、木彫レリーフなどの創作活動にはげみ、数度の個展をひらく。
- （以後一九七〇（昭和四五）年にかけての創作活動および随筆、詩集の編集などの成果については、『同時代——特集・土方久功』を参照されたい。）
- 一九七七（昭和五二）年一月一日、東京、東電病院にて死去、享年七十六歳。

土方さんは、昭和四年、単身で南洋へ渡航する。若き芸術家・土方久功さんが南洋の小島に魅せられた背景には、二つの動機があった。一つは、ゴーガンのタヒチでの生活への憧憬、「南洋原始」に身をおくことよって「日本十原始」をつくりだそうとした芸術家としての探究心である。もう一つは、民族的な関心である。土方さんは、学生時代から、考古学、民族学、言語学に興味をもっていた。鳥居竜蔵、西村真次、松岡静雄、金田一京助などの日本人の著作を読みあさるだけでなく、フレーザー (Frazer, J. G.) の『金枝篇』、ペリー (Perry, W. J.) の『太陽の子』などにも目を向けていた。それらをとおして、土方さんは、「未開社会」ないし「未開人」にたいするイメージをかためたのである。

しかし、パラオでの二年半の生活でみたものは、土方さんが頭に描いていた自由で明るい「未開人」のイメージとはほど遠いものがあった。そこには、「植民地支配」をしいられつつある「半未開人」のすがたがあった。より「原始」な世界を求めた結果、「海上の島・サテワヌ」にゆきつくことになる。サタワル島は、土方さんにとって、芸術家としての探究心と民族学的興味とをみたくしてくれる「理想」の島になったのである。

土方さんは、『流木』の序文で、民族学(者)とその道に素人である自分とのかかわりについて、つぎのように述べている。「私は、民族学、人類学の論文などは書けない」けれども、真面目で嘘のない資料を専門家に提供して、「ただ少しでもお役に立てれば幸いである」と(土方一九四三…四)。この土方さんの本意は、後述する著作と論文とに貫きとおされており、それらを世に出す原点となっている。

## 著作と論文

### 著作

『ヤップ離島サテワヌ島の神と神事』一九四〇年、南洋群島文化協会、一―一六三頁(本書第五章に所収)。

『流木』一九四三年、小山書店(一九七四年に未来社より、『流木——ミクロネシアの孤島にて——』の題名で覆刻)。

『サテワヌ島民話』一九五三年 三省堂(一九七六年にアルドオより、『覆刻・サテワヌ島民話——ミクロネシアの孤島にて——』の題名で復刊)。

『文化の果にて』一九五三年、龍星閣。

### 論文

「ヤップ離島サトワル島島民の慣習」『中央大学学報』六五号、三一―三二頁、一九三九年。

「ヤップ島及びペラオの離島に於ける財産並びに職権の相続に就いて」『太平洋』三巻四号、一一七一—一四〇頁、一九四〇年（本書第七章および第八章に所収）。

「サテワヌ島に於ける子の養育と性的秩序」『東亜論叢書』第四卷、二四一—二六一頁、文求堂、一九四一年。

「サタワルに於ける漁法——並に漁魚乃至魚に関する呪儀、禁忌其他——」『人類学雑誌』五六卷六号、三一〇—三二六頁、一九四一年。

「サタワル島に於ける葬儀——並に死及び葬儀に関連する呪儀、禁忌其他——」『民族学研究』七卷二号、一二三—一三四頁、一九四一年（本書第五章および第六章に所収）。

「サタワル島に於ける〈穢れ屋〉に就いて」『民族学研究』八卷一号、八三—九四頁、一九四二年。

「南洋土人の結婚・離婚・姦通」『季刊人間研究』二五—三九頁、国土社、一九五二年（本書第六章に所収）。

「女系社会における〈父〉」『女性と経験』二卷一号、一〇—一六頁、女性民俗研究会、一九五七年。

「サトワヌ島の神憑り」『女性と経験』三卷一号、八一—三三頁、女性民俗研究会。

『流木』、『サテワヌ島民話』が、一九七〇年代に覆刻されたことから明らかなように、土方さんの収集された資料の質とその記述内容は、現在でも人類学、民族学、神話学および言語学の研究分野で高い価値をもちつづけている。いずれの著作においても、七年間の生活体験、緻密な観察眼と優れた言語能力とによって、サタワル島の人びとの生きざまが平淡な筆致で描きぬかれている。『流木』は、一九三一年一月に、土方さんがサタワル島に上陸してから一年間のあいだにおこった出来事を日記の体裁で詳細に書き綴ったものである。その内容は、サタワル社会の忌避習俗、通過儀礼、社会組織、財産の所有形態から、人びとの労働慣行、航海への情熱、呪術、宗教的観念など広範な分野におよんでいる。この著書で、土方さんは、私見や主観的価値観をほさむことなく、サタワルの人びとのありのままの生活の営みを描いており、これは、一九三〇年代のサタワル社会の貴重な生活記録である。

『サテワヌ島民話』においては、島の人びとが語りついできた一八〇編余りの神話や民話をおさめている。そのうちの二七編は、サタワル語と日本語との対訳である。ここでも、正式な言語学の教育をうけなかったにもかかわらず、土方さんの奇才ともいえる「語学力」が存分に発揮されている。サタワル語は、九個の母音と二個の半母音、子音でもそり舌共鳴音、鼻音（本書一〇頁、音声表記表参照）などで構成され、日本語にくらべ、はるかに複雑な発音体系を示している。土方さんは、そ

これらの音声と音素を的確に聞き分けて、独自の一貫したアルファベットによる表記法で記述した。また、一九三〇年代に二〇〇編にもおよぶ口頭伝承をこの地域で収集した研究家は西欧にもいないことから、この著書をとおして土方さんが精根をこめた仕事の偉大さがうかがえる。

『文化の果にて』は、パラオとサタワルでの生活の断片を、多くの木版画を挿入して書きしるした紀行文である。この書の序文で高村光太郎は、土方さんの浮彫木彫が、「原始感・ブルース現代感の美はちょっと類がない」と評している。これは、芸術家として求めていた「原始+日本」の作品をつくりあげたことを意味していると解せよう。

また、土方さんは、サタワル島に関してだけでも九編の論文を発表している。パラオについては、著書『パラオの神話伝説』大和書店、一九四二年(二書房より復刊の予定)と一六編の論文が公にされている。そのうちの三論文、「パラオ島民の親族縁族」(『科学南洋』三巻一号、二七—四二頁、一九四〇)、「パラオの石神及び石製遺物」(『民族学研究』二〇巻三・四号、一—五三頁、一九五六年)、「パラオ紋様土器片採集記」(『人類学研究』七巻一号・二号、六六—八九頁、一九六〇年)、一九七三年にグラム大学のミクロネシア地域調査センターの刊行物として英訳された。土方さんの論文が掲載された雑誌『民族学研究』、『人類学雑誌』は、いずれも日本民族学会、日本人類学会の学術機関誌である。

#### 本書の構成と内容

本書は、長期のインテンシヴ調査によるサタワル社会の記述と短期のエクステンシヴ調査に基づくカロリン、マーシャル諸社会の素描という二部で構成される。一つの民族誌をどう読むかは読者個々の自由であり、余計な解説など無い方がましである。そのような認識にたつたうえで、本書の内容を整理し、若干のコメントをくわえてみようと思う。

第一章は、サタワル島の自然環境およびサタワル語に関する紹介である。ミクロネシアの言語は、オーストロネシア(マラヨ・ポリネシア)語族に属し、核ミクロネシア諸語と西部ミクロネシア諸語(チャモロ、ヤップ、パラオ)とに大別される。前者は、ナウル、ギルバート、マーシャル、コシャエ、ポナペとトラックの六つの語群に分類される。サタワル語は、東はモートロック諸島から、西はパラオ南西のトビ島にいたる珊瑚礁の島々の言語とともに、トラック語群に含まれる。したがって、本書は、核ミクロネシア諸語、トラック語群に帰属する社会の調査に力点を置いたことになる。

第二章から第四章までは、サタワルの政治および社会構造についての詳細な記述である。サタワル社会では、生産手段、つまり土地および食料資源を所有し、婚姻を規制する基本的な社会集団は、ヤイナンとよばれる母系出自集団(jingae)ないし clan(氏族)である。系図からも明らかのように、その集団は、四〜五世代間の女系の系譜関係を共有する人びとより構成さ

れる。一九三一年の段階（現在も同じ）で、八つのヤイナンが三つの首長氏族と五つの平民氏族とに分化している。

この階層化は、サタワル島への移住の歴史的順位に基づく。最初に島へ定住して島を占有・統治した氏族が、島の第一首長の地位についていた。その氏族は、後統の移住者に、土地を分割贈与し、それらを輩下に置いた。サタワルの人びとは、口頭伝承によるこの歴史を「事実」と信じている。この氏族起源説話は、一族の重要な「秘密の知識」で、世代をこえて継承されている。

そして、それに裏づけられた氏族間の序列は、土地の分与をうけた氏族員が第一位氏族の首長に、毎年、初物（パンノキの実）を献上する行為によって確認される。このように、氏族の移住順位によって、集団の政治的地位差を規定する慣行は、ミクロネシアの珊瑚礁の島々に共通する。わずか、数百の人口しか擁さない島社会でも、主従の身分階層制によって社会秩序が確立されているのである。

第三章では、とくに社会関係の類別原理とそれに基づく行動規範が具体例をもとに描かれている。サタワルの関係名称には、「おとうさん」とか「おばあさん」という呼称がない。他者への呼びかけは、すべて個人名がもちいられる。しかし、二者の関係を表わす名称、「あの人は、私のハハです」というような指示名称は存在する。その名称体系は、基本的には、世代（ハワイ）型に属す。世代が上の男性は、チチ、女性ハハハ、同世代はキョウダイ（性別の区別あり）、下の世代は、すべてコドモである。ただし、母の男性キョウダイとその姉妹のコドモとの関係をさす特別の用語が存在する点で、ハワイ型の典型とは異なる。

これは、母方オジ（ツクファイ）と姉妹のコドモ（ファツウ）との関係の強調を示すものである。母系社会においては、集団の財産を管理し、秩序を維持する責任者は、チチではなくて母方のオジである。そして、それらの職権は、母方のオジから姉妹のムスコへとうけつがれる。つまり、それらの用語は、集団統轄の地位継承のすじを表現しているのである。著者は、この継承方式を将棋の桂馬の動きに比定して、「桂馬相統」と説明した。

前述の対人関係の類別法によるなら、ある人は、一〇人ものチチ、二〇人ものキョウダイをもつことになる。そのために、彼らは、自他の集団成員を識別する行動規範をもうけている。それが、同じ氏族員どうしに義務づける禁忌事項である。具体的には、丁寧語の使用、尊敬行為、直接的接触の禁止、卑猥語の忌避などである。サタワル社会では、親族紐帯のかなめは、親子関係でなく、キョウダイ関係にあると考えられている。したがって、性関係や結婚の忌避表現の象徴として、前述の諸規範がとくに異性のキョウダイ間に厳しく課せられるのである。



妻方居住方式をとるこの社会では、日常的な生活を営む単位は、同じ氏族の女性成員と彼女たちの夫たち、彼らの子どもおよび未婚の男性である。それに、養子がくわわる。この集団は、母系大家族とよべる。婚入した男性は、主に、妻の集団の財を使用して妻や子どもの食料の獲得活動に従事する。しかし、子どものしつけや教育に強い権限をもつのは、ほかの集団に婚出している妻の男性キョウダイであり、父親は「養育者」としてだけの地位にあまんじる。妻は、夫が子どもの養育や食べものをうるための労働を怠けた場合には、「追い出す」権利をもっている。このように、男性は、自分の集団には集団の監督者としての権限をもつが、婚出した妻の集団においては、「よそのもの」で「低い」地位におかれるという、両義的存在である。

第五章では、カミガミの体系および靈魂観をとりあげている。サタワルの人びとが、一九五三年に一斉にキリスト教へ改宗したこともあって、この記述は、記録として重要な意味をもつ。人びとの伝統的な生活は、カミとのつきあいでありなっていた。カヌーの建造、航海、漁撈、タロイモやパンノキの栽培から風しづめ、病氣治療、人生儀礼にいたるまで、すべて個別のカミと関連する儀礼が実修されていた。しかし、著者は、どうしたわけか、サタワルの人びとの生存の根本となっていたカミとのつきあいの実際には、深く立ちいっていかない。その種の儀礼は、厳しい禁忌をとまなう秘儀で、部外者の参与を拒否する性格のものであったためであろう。いずれにせよ、カミ觀念の具現化である儀礼の記述が欠如している点が本章の大きな弱点である。

第六章で著者は、サタワルの人びとの一日、一年、そして一生におよぶ生きざまと生きがい、実在する個人の生活史とおして克明に描きあげている。限定された食料資源の保護と利用、男女の分業と競争的生産活動による資源の活性化、「島の食べもの」にたいする「共有」および成文法をもたない社会での「恐れ」と「恥」の觀念に依拠する人びとの行動様式など、著者は、サタワルの人びとが教えてくれたありのままのことを忠実に報告している。この核心にせまる記述法は、「民族誌」の真髄をなすものである。

第七章は、島の生活でもっとも重要な生活資源の基礎となる土地と樹木（ココヤシとパンノキ）の所有と相続についての記述である。注目されるのは、母系社会において、それらの財が、母系相続だけでなく、男の集団が、その集団から婚出した男の子どもにもいくらかの財を贈与する点である。つまり、父―子との関係でも財の一部が相続されるのである。サタワルの人びとは、母系の系譜をとおして相続されるものを集団の「幹となる財」、男系的に移譲されるそれを「贈られる財」と類別している。

著者は、集団間を財の使用権のみであるが、男性の移動とともに流通する性格のものである。これは、集団の財の保有量と

成員人口との均衡を保つための実に合理的な方法である。これは、資源に恵まれない島世界において、集団構成の原理を母系出自で貫徹しながら、集団の人口増加を男系的な財の移譲によって補完する制度といえよう。

第八章は、カロリン諸島の社会組織の記述と比較である。著者も指摘しているように、パラオの南西離島以外は、すべて母系出自妻方居住、母系相続が卓越する。この母系制の普遍性は、どのように解釈すべきであろうか。また、サタワルのように「典型的」な母系社会もあるが、ドイツや日本統治時代に父系優先の政策、男性の現金獲得による男性の経済的役割が強まったトラックやポナベのように、父系的な集団構成が顕著になってきた社会もある。その意味で、ミクロネシア社会は、本書の資料と現在の調査研究とによって、人類学の古くて新しい問題である母系制から父系制への移行過程のメカニズムを解明するための、重要なデータを提供してくれるのである。

#### 民族誌家としての土方久功

『流木』と本書は、前述したように、サタワルの社会と文化についての総合的記述である。土方さんは、そこで、サタワルの人びとの心(エトス)をも把握し描きあげている。それらの記述内容は、文化人類学や民族学を専攻する学徒の仕事と比較しても決して遜色がない。逆に、人類学徒による一年程度の調査ではうみだすことのできない「事実をして語りしめる」重みがある。また、土方さんの記述の「偽りのなさ」は、五〇年後にサタワル島で調査をおこなった私の経験でも実証された。土方さんの仔細な観察と島の人びととの真摯なかかわりあいのものであみだされたこの生活記録は、「民族誌」の条件を十分にそなえているということができた。したがって、私は、土方さんを「民族誌家」と位置づけたい。

土方さんを「民族誌家」と位置づけたが、ここで、民族誌と民族学(文化人類学)とについて簡単に説明しておこう。民族誌は、フィールドワーク(現地調査)によって収集した資料に基づいて作成される、特定の社会と文化についての記述である。それにたいし、民族学は、諸民族の文化を比較研究し、一般理論ないしモデルによって異文化を解釈する学問である。つまり、民族学の基礎は、多くの研究者の手による個別社会の民族誌にある。民族学の現地調査は、自分の文化とは異なるほかの文化で実施することが伝統となっている。言語、制度、慣習、観念などの異なる文化において、それらを把握し、民族学のことば(学術的用語)で書き表わすには、研究者自身に身体的訓練はもちろんのこと、深い洞察力と想像力、体系的な構成力が要求される。

イギリスの人類学者、エヴァンスリプリーチャード(Evans-Pritchard, E. E.)が指摘しているように、人類学が目的とする異文化理解とは、基本的には、文化の翻訳の問題である「エヴァンスリプリーチャード一九七〇:二三」。異なる社会文化の諸現象

を翻訳する作業は、単なることばの置きかえだけでなく、その社会のもつ分類体系、行動規範、価値観から、象徴や比喩などの言語表現にいたるまでの、総合的理解を前提としているのである。このような点から判断しても、土方さんの『流木』および本書は、質・量ともに、「本物の」民族誌とみなせる。したがって、土方さんは民族学の専門家ではないけれども、民族誌家と位置づけることができるのである。

私事にわたるが、私は、まだ大学院生でミクロネシアでの調査を計画していた一九七四年の春に、土方さんのお宅にお邪魔したことがある。それは、土方さんから南洋群島の文献やパラオやサタワルのお話をうかがうことが目的であった。土方さんは、日本統治時代の日本の人類学者の研究方法についてふれられ、「学者の仕事は、島の人びとの考えを重視せずに自分の頭でものを書いてしまう」ともの静かに語られたのを今でも鮮明におぼえている。このことばは、ややもすると既成の理論を適用して調査地の事象を把握しようとする、民族学の専門家にたいする民族誌家の立場からの批判ともうけとれる。

私は、土方さんとお会いしてから四年後（一九七八年）に、念願かなってサタワル島で調査をおこなうことになった。そのときの調査テーマの一つは、「サタワル社会の文化変化」であった。土方さんの著書や論文に描かれた一九三〇年代のサタワル社会や人びとの考えが、五〇年後にどのように変ったかを逐一聞きだしていったのである。そのさいに驚いたことは、土方さんが記述した事項はもちろん、固有名で登場する人物の系譜および彼らの生活史に、一つのくいちがいをも発見することができなかった点である。この記載された内容の詳細さと正確さは、土方さんがサタワル語を「第二の母国語」とし、「サタワル人になりきっていた」という事実を如実にものがたるものであろう。

私は、一九七九年から八〇年にかけて、約一〇か月間、国立民族学博物館の石森秀三助手と秋道智彌助手とともに、再度サタワル島で民族学の総合調査を続けた。その調査期間中はいうにおよばず、現在進めている成果のまとめや、『サタワル語—英語辞典』の編纂においても、われわれは土方さんの著書と論文を「座右のテキスト」として参照させていただいている。

最後に、日本統治時代の南洋群島で調査に従事した研究者の業績を紹介しながら、土方さんの民族誌家としての立場を位置づけてみたい。この時期を代表するのは、『ミクロネシア民族誌』を著した松岡静雄、『南洋群島』の矢内原忠雄、『ミクロネシアの風土と民具』の染木煦と、民族学の近代理論と方法を身につけた民族学者、杉浦健一などである。

松岡は、南洋群島を巡航したが、南洋庁の役人から提供された現地資料と既往（ドイツ）の文献とによって、著書をまとめている。それは、島々の歴史、社会、信仰、衣食住、民具などを多面的に網羅しているが、記述内容に奥がなく、「民族誌」というよりはミクロネシア民族学の「概説書」の性格がつよい。矢内原は、政府の依頼をうけて現地住民の近代化と日本人の

南洋進出の問題をテーマに、南洋群島で二度の調査を実施した。しかし、その著書は、現地の生の資料が生かされておらず、南洋庁の役人、教師、医師、牧師などへのアンケートや文献による記述で占められている。それについて、画家の染木は、半年間にわたってミクロネシアを旅行し、当時使用されていた民具類の徹底した収集と、スケッチつきの記録を残している。この著書は、現在では、消え失せたミクロネシアの多くの物質文化を知るうえで欠くことのできない貴重な「資料集」となっている。

杉浦は、当時、国際学界の理論的主流をなしていた機能主義の立場から、ミクロネシア研究に本腰を入れた。<sup>(4)</sup>一九三七年から四一年にかけて、南洋庁の嘱託としてパラオ、ヤップ、ポナペ、マーシャルなどで、呪術・宗教、社会・政治組織、土地制度や漁法などの調査を意欲的に続けた。その成果は、二〇編余の論文に発表されている。それらの内容は、「個々のテーマ別に、体系的論理性を追求したものである。とくに、パラオとポナペの土地制度をあつかった「南洋群島原住民の土地制度」は、詳細な事例の分析である。これは、記述内容の事実関係にあまり個所があるものの、今日においても利用できる報告書といえよう。いずれにせよ、杉浦の一連の業績は南洋群島の家族、親族や村落構造をひろくオセアニア諸社会のそれらとの比較によって把握した点で、民族学的に高く評価できる。また、今西錦司を隊長とする京大地理学会のポナペ島調査も注目される。わずか二か月の調査ではあるが、五人の研究者の手による調査の成果は、『ポナペ島——生態学的研究——』に結実している。

以上でのべてきた研究は、いずれも現在の民族学の現地調査の期間からみれば、かならずしも十分なものとはいえない。また、民族学の原点である民族誌としての内容においても、個別社会の文化要素を全体的に把握しているとはいいがたい。それらのことから、特定社会での調査年数と報告書の記述内容および構成の点でも、土方さんの業績の占める位置は、おのずおしはかることができよう。また、オセアニアに限らず世界の特定民族についての日本の民族学者の手による数年間の調査にもとづく総合的な民族誌は、現在においてもそれほど多くはない。その意味でも、本書は学界の貴重な共有財産である。

(1) 土方久功の年譜および芸術作品、詩集、随筆集などの成果は、『同時代』三四号で詳しく紹介されている。また、氏の芸術家としての立場も、前書や岡谷公二の『島の精神誌』等で明らかにされている。

(2) 宇佐美英治(一九七九)、岡谷公二(一九八一)参照。

(3) 筆者は、『サテワヌ島民話』に掲載されている民話と筆者の収集した資料との比較を試みたことがある(須藤一九八〇)、また、吉田敦彦は、神話学の立場から土方さんの採集した神話の分析と考察をおこなっている(吉田一九七九)。

(4) 杉浦健一の年譜および業績の評価については、泉靖一(一九五四)、祖父江孝男(一九七六)に詳しい。  
(5) 石川は、『日本民族学の回顧と展望』のなかで、一九六〇年代までのミクロネシアにおける調査研究の歴史と研究者個々の業績を論評している(石川一九六六)。そのなかで、石川は、土方さんが、一九六〇年以降報告書をだしていないことについて、「なお豊富なオリジナル資料を所有しているものと思われるが(中略)絶えてこれ(報文)に接することができないのが残念である」と述べている。本書は、学界のそのような要望にこたえる民族誌でもある。

## 文献

石川 栄吉

一九六六 「民族学的地域研究の発展・オセアニア」『日本民族学の回顧と展望』日本民族学会編 三四二―三四九頁。

泉 靖一

一九五四 「故杉浦健一教授と人類学・民族学——追悼と評伝——」『民族学研究』一八巻、二六六―二七二頁。

今西 錦司編

一九四四 『ボナヘ島——生態学的研究——』彰考書院(一九七五年講談社より覆刻)。

宇佐見英治

一九七九 「土方久功の彫刻」『同時代』三四号、一三六―一四三頁、法政大学出版局。

牛島 巖

一九七九 「土方とサタワヌ島」『同時代』三四号、一六四―一六八頁、法政大学出版局。

エヴァンス・ロブリンチャード、E・E

一九七〇 『人類学入門』(吉田禎吾訳) 弘文堂。

岡谷 公二

一九八一 『島の精神誌』思索社

Goodenough, W. H. and Hiroshi Sugita

1980 *Trukese-English Dictionary*, Philadelphia: American Philosophical Society.

須藤 健一

一九八一 「カヌーと航海にまつわる民話——ミクロネシア・サタワル島の伝統的航海術の外延——」『国立民族学博物館』

研究報告』六卷四号、六三九—七六六頁。

杉浦 健一

一九四四 「南洋群島原住民の土地制度」『民族研究所紀要』第一冊、一六八—三五〇頁。

祖父江孝男

一九七六 「杉浦健一——ミクロネシア研究の先駆者——」『社会人類学年報』二卷、一四二—一五八頁、弘文堂。

染木 煦

一九四五 『ミクロネシアの風土と民具』彰考書院。

松岡 静雄

一九二五 『ミクロネシア民族誌』岡書院（一九四三年、岩波書店より再刊）。

村上 光彦編

一九七九 『同時代』三四号——特集・土方久功——』法政大学出版社。

矢内原忠雄

一九三五 『南洋群島の研究』岩波書店。

吉田 敦彦

一九七九 「サテワヌ神話のオイディプスとウラノス」『同時代』三四号、一五七—一六三頁、法政大学出版社。